

わたしには、父がいて母がいて、いっしょに暮らしていたひとりの少女でした。

父は狩りがへたで、くまや鹿やうさぎをいつびきもとることができませんでした。それで、わたしは、肉や魚を食べたことがありませんでした。村の人が捨てた、土の付いた骨やすじを拾って来て、洗っては、ことごと煮て食べたりして暮らしていました。

わたしは、だんだん大きくなって、今は一人前の娘になりました。わたしは男のように狩りに行くことはできないので、畑をたがやして、ひえやあわを作って、父や母と暮らしていました。

わたしの村の上にも下にも、たくさんの人が住んでいる村があります。

ある日のこと、下の村の村長の妻が、病気になって、今にも死にそうだといううわさを聞きました。そしてまもなく、その妻は、とうとう死んだという話が伝わってきました。

わたしは、お悔^{くや}みに行きたいと思いましたが、持つて行くものがないばかりか、着ていく着物也没有せん。わたしは、あきらめて、自分の小さい畑で、草取りをしています。すると、村の人たちが、わたしのそばを通りながら、

「人が死んだのに、貧乏だからといって、お悔^{くや}みに行かなくてもいいのかねえ」と、聞こえよがしにいつて、通り過ぎていきます。わたしは、お供^{そな}え物もないし、着ていく着物もない。悔しくて、涙が出ました。

お昼になったので、わたしは、畑のあぜに座って、しょんぼりと、お弁当を食べはじめました。お弁当といつても、うばゆりの団子^{だんご}のようなものです。すると、後ろのほうで、がさつ、がさつと音がしました。

ふり返つてみると、それは、五、六本かたまつて生えている、はぎの木でした。枝と枝のふれ合う音が、人間のこつばのように聞こえました。

「娘よ、よく聞きなさい。わたしは、ごらんのとおりのはぎだ。おまえは、いつもわたしの目の前で働いているので、おまえがほんとうに氣立てのやさしい娘であることをよく知っている。下の村の村長の妻が、病気で死んだが、それには大きな理由があるのだよ。おまえは急いで家に帰り、干^ほしてしまつてあるプクサの葉を背負つて、お悔^{くや}みに出かけなさい。あとは別の神が、おまえに耳打ちをしてくれる」

わたしは、おどろきましたが、大急ぎで家に帰りました。そして、干してしまつてあつたプクサの葉をふくろに入れて背負い、下の村へ急ぎました。

下の村の村長の家には、おおぜいの村の人たちが、美しい着物を着て、思い思いの供え物をもつて、お悔やみに来ていました。そのなかで、わたしひとり、あかだらけのぼろを着て、供え物といえ、干したプクサの葉だけです。村の人たちは、

「あんな汚い貧乏娘が、よくもまあ来たものだ。はずかしい」と、わたしにも聞こえる声でいいました。わたしは、もう、家の中には入らずに帰ろうかと思いました。けれども、

「自分が来たくて来たのではない。神がわたしをつかわしたのだ」と、自分にいい聞かせて、静かに家の中に入りました。

おおぜいの人、いっせいにわたしのほうを見ましたが、だれひとり声をかけてくれる人はいませんでした。そのなかで、たったひとり、村長だけが声をかけて、

「さあさあ、こちらへ寄ってください」といつてくれました。

わたしは、にじり寄るように少し前へ進みました。家の中を伏し目が見まわすと、壁のところ、たくさんの大きなべや、小さなべが並べてかけてありました。そのとき、一番近いところにある小さなべが、ゆらつ、ゆらつと動いたように見えました。

目を凝らしてよく見ると、ふちの欠けたそのなべは、ふたをがたがたさせながら、何かものをいつているようでした。そつと耳を近づけると、なべはわたしに話しかけてきました。

「貧乏ではあるけれど、心のやさしいおまえにお願いがある」と。

そして、小さなべ、欠けたなべは、こう話しました。

「この村長の妻が病氣になつたわけは、保存用の山菜の取りかたがいけなかつたからだ。山に生えている草にも木にも、みな魂があつて、役目があつて、天からつかわされてきているのに、村長の妻は、プクサをとるときに、一本も残さず、根っこまで引き抜いてしまった。そうなれば、来年の春に芽を出すことができないで、プクサの神さまは死んでしまう。村長の妻がプクサを根絶やしに取つたので、プクサの神さまが怒つて、病氣にして、気づかせようとしたのだ。そこで、おまえがお供え物として持つて来た、干したプクサの葉を持つて、村はずれの南に面した斜面に行き、『プクサの神の魂を返す』といいながら、プクサをまき散らして来てほしい。そうすれば、なんとか妻の命が助か

ると思う」

それを聞くと、わたしは、さっと立ち上がって、家の外へ飛びだしました。そして、なべの神が聞かせてくれた村はずれの南の斜面へ走りしました。ふくろから干したプクサの葉を取り出して、あたり一面にまき散らしながら、

「プクサの神の魂を返します。アイヌの女の命を助けてください」と、大声でいいました。

わたしは、すぐに村長の家にもどりました。そして、村長の妻がプクサを根絶やしに取ったために、神の怒りに触れたことや、いまプクサの魂を返して来たことを、まくしたたてました。

人びとは、総立ちになつて、村長の妻の死に装束をぬがせ、魂を呼びもどす宝を出して、大声で神々に救いを求めました。体をもみ、お湯で体を温めて手当てをしているうちに、顔色がもどって来ました。プクサの神が魂を妻にもどしたのでしょうか。爪にも血の気がさしてきました。人びとが、なおも神々の名を呼んでいるうちに、ようやくまつ毛がびくりと動き、息を吹き返しました。

そのとき、わたしは、われに返りました。貧乏娘の私が、ぼろを身にまとっているくせに、こんなに大勢の人の中で、何とばかりしいことをしたのだろう。どさくさにまぎれて、わたしは、さっさと家に帰りました。

わたしは、なんとなく悪いことでもしたような気持ちになって、父にも母にも、今日の出来事を話ませんでした。ものもいわず寝床にもぐりこんで、何日も何日も寝ていました。

どのくらい日がたってからでしょうか。外にも音がして、人の気配がありました。

見ると、村長と村長の妻が大きな荷物を背負って立っていました。

何も知らない父は、目を白黒させながら、おどろいてふたりを迎えました。そして、わたしがしたことを事こまかに聞いて、二度びっくりしていました。ふたりが背負ってきたのは、たくさんを着物や、干し肉、干し魚でした。宝物もどっさりありました。それを、父の前に差し出して、

「これは、お礼として持って来たので、どうぞお受け取り下さい」といいました。

わたしは、はぎの神や小さい欠けたなべの神が、わたしにいろいろと教えてくれたことを話しました。父と母は、

「よかった、よかった。心がけのいい人は、神が見てくれるものだ」といって、涙を流して喜びました。

村長の妻は、あらためてお願いがあるといって、こう話しました。

「わたしがプクサの神の怒りに触れて一度は死んだのに、助けてくださって、ほんとうにありがたい。わたしは、村長の妻としてふさわしくないと思うので、これからは、村長の家の水くみ女になります。わたしのかわりに、あなたが、村長の妻になってください。もし、お聞き入れくだらないなら、わたしはこの場で自害^{じがい}します」

わたしは、そんなことはできないと、何度も何度も断りましたが、聞き入れてもらえませんでした。そして、とうとう、村長の妻になりました。

それから、父と母も何不自由なく暮らせるようになりました。はぎの神さまにもイナウをあげ、なべの神さまもイナウで包んでたいせつな宝物にしました。

生まれは貧しかったけれども、いろいろな神さまがわたしを守り、そっと話を聞かせてくれたおかげで、いまは、何をほしいとも、何を食べたいとも思わずに暮らしています。

「だから、今いる女たちよ、プクサや山菜がどんなにたくさんあっても、根絶やしにとつてしまうものではありません」と、ひとりの女が、語りました。

村上郁再話

資料『アイヌの昔話―ひとつぶのサッチポロ』萱野茂／平凡社